

III. 大学における性教育

村瀬 幸 浩

④ 尋常な書き方でないことは十分承知の上で、まず学生のレポートの一部をいくつか紹介することから始めたい。

テーマは『私のセクシュアリティ形成について』である。受講者はすべて2年生である。

(1) 女性I

私のセクシュアリティ形成に大きな影響を与えたのは母の姿である。幼い頃夫婦仲は非常に悪く離婚寸前であった。威圧的で暴力を振るう父に対し母は激しく抵抗したが、一方でそれに耐え忍んでいた。離婚にふみ切れなかったのは、子供や世間体以外に、そんな父でも母は愛情を捨て切れなかったのだろう。

耐える女の姿を見て育った私の、男性への姿勢もまた同様となった。男の自己中心性や強引さを当然のように受止め、さらにそんな男性に無意識に惹かれ始めた。付き合った男性で心から愛せたのは独占欲の強い人であった。彼の拘束に反発しながらもそれをどこかで快く思っていた。彼と別れてしばらくは自由の不自由さに悩んだ。しかし変化が訪れた。彼とよく似たタイプの先輩と関係してしまったのである。拒めなかったのは別れた淋しきの為ではない。二人共心の底では互いに惹かれ合っていたのだと思う。しかし現実は厳しかった。彼には彼女がいた。私は彼女の気持や先輩の立場、周囲の状況を考えこの問題を一人で抱え込もうとした。とても辛いが自分だけが苦しめば済むのだと思っていた。——耐える女を演じていたのである。

しかし私は女である前に人間でありたいと思った。私の人格はどこに行ったのか、耐え忍ぶ女は哀しすぎる。自己の人格ぐらいいは主張できる女でありたい。母と同じ苦勞を避ける為にも私は自分の経験を生かしたいと切に思う。

(2) 男性T

私にはセックスに関して苦い思い出がある。相手の女性の中絶である。高校二年の頃でした。避妊用具にコンドームを使用しました。相手の女性とは初めてではありませんでしたが定期的に性行為をしていた訳でもありませんでしたので両方とも避妊ということについてあまり注意をしていませんでした。正直言って事実を知らされた時には半信半疑で、ある意味では責任をのがれようとしていました。彼女が病院に行く時も付き添いませんでした。費用も全く負担しませんでした。薄情であると思われても仕方ありませんが、事実を認めることは非常に恐ろしかった。表面上はことが片付いて彼女と逢わなくなってから何とも言いようもない申し訳なさで後悔を感じました。今でもそれは感じています。あの時のセックスが私にとって愛情ではなくむしろ快楽のためであったことが本当に何と言ったら良いか分らないけど、つらいです。

この経験を通じて私はセックスという行為がいかに重いものであるかを感じました。そして行為そのものに不安と嫌悪を感じることもあります。まわりの人間の無責任な体験談をきかされると彼に腹立たしきを感じるのと同時に、自分自身の無責任さを後悔します。

(3) 男性K

私が育った生活環境というものはあまり一般向けではないようで、それがためというわけでもないが少々特異なセクシュアリティの形成をみたのではあるまいか。まず両親の仲が極めて悪い。物心ついた頃から四六時中いがみあっていたと記憶している。そして私が小学校六年生の時に離婚してしまい、その後は母は一回、父は三回も再婚して現在に至っている。また特に父は過保護であっ

たため利己主義に育ち、これが原因で人間関係とりわけ女性関係には至極トラブルが生じやすく、結果的に女性との関係を保つことに疲れを感じて逃げがちになっているのが現状である。高校が男子校であったのも一因してると考えられる。

しかしながら女性に対する興味を持ち得ないというわけではなく、結果として二次元コンプレックスに陥ったというわけである。授業中に先生もおっしゃっていたが、アニメ・まんがの女性キャラクターに甘んじている。こんな私でも現実の女性とのそうした関係がなかったわけではないがいずれも性格が災いしてあえない最期を遂げ、私はよりいっそう自分の思い通りになる二次元キャラに逃げてしまっている。

でも私はこの、いかにも反社会的な生活関係でもよいと考える。というのは、二次元の世界において夢を見ておけば現実において幻想を抱かないで済むと割り切ってしまうことができるからである。

(4) 女性N

私の今日にいたるセクシュアリティの形成にとって最も大きな影響を与えたものは、私自身の母による教育であると思う。女という性をもつ人間としての生き方や考え方について私は誰よりも大きな影響を母から受けた。

私が小学校六年の頃、早熟な子供達は『明星』という雑誌を読んでいた。そういう雑誌の後のほうには必ず悩み相談の欄があり読者のセックスに関する相談が掲載されていた。それらの記事は興味本位で刺激的に書かれており当時の私にはほとんど理解できない内容であったが、ちょうど性的なものを意識しはじめる年齢でもあり、友達から借りた雑誌などで読んだりする機会が何度かあった。

そんな私を見ていた母はある時私を呼んで、人間の体のしくみや生物としての人間の生殖のしくみなどを教えてくれた。行為としてのセックスの話は私にはうすうす感じられていたにせよ非常に衝撃的であった。しかし母は性をタブー視するよ

うな態度は全くなしに、おだやかな口調で私に語った。私は初めて知ることばかりでショックのあまり泣きながら眠った。

しかし、その後しばらくしてから、私は母の行った行動に感謝した。興味本位の偏った知識をもって性を誤って認識してほしくなかったからきちんと説明したのだ、と母は言った。この事件で私は性について率直に語り、性をまっすぐに見つめるという態度を学んだ。それは今でも女としての自分を自覚するときの根幹となっているように思う。

(5) 男性N

私は中・高と男子校でした。中学時代は寮、高校時代は下宿と、親もとを離れて生活していました。この六年間の生活は私のセクシュアリティ形成に大変大きな影響を与えました。男子校にはやはりホモがいました。私はなぜかそういう人に好かれてしまい、ちょっと困っていました。しかし元来からののんきな性格もあって「別に人を好きになるのに性別は関係ないのでは」と思うようになりました。その結果、その手の人には理解ある人だと勘違いされて、いろいろと相談を受けたりしました。また一方ではそうでない人たちと女性への関心をあたためたりもしていました。

この人格形成の大事な思春期にホモの人にあつて、私はいろいろと考えさせられました。私はホモではないけれどホモを否定する気はおこらなくなりました。前にも述べましたが「人が人を好きになるのに性別は関係ない」というのが私の性に関する考え方です。

(6) 女性S

六年間、中高ともに女子校であったため、どちらかというと男性に関する知識などにあまり接しないで十代を過したが、そのかわり女の子同士、生理の悩みなどは開放的に話していた。保健の授業で中絶や避妊の解説もあり自分とはかけ離れたことのように聞いていた記憶がある。大学にきてこの体育講義が私が最も影響をうけた性教育だったのであるが、その後、知りあいの男の子達が、

早く女の子とラッキーしようぜ的なことを私の目の前で話していた時には本当に苦々しく思った。

実際この体育講義は私の性に対するイメージを大きく変えてしまった。高校の保健でも、安易な性意識は自分も他人も不幸にしてしまうと云われたが実感がなかった。

ビデオや映画による視覚的效果からか、私はもう性を遊び半分のものだとは決して思えない。私の高校にも男友達と家出してしまったという人がいたがその頃には何故先生方がその生徒は一生を台無しにしてしまうかもしれないとあわてふためいているのかよくわからなかった。

私の家では家族で性の話をするのはタブーとなっているが、これから母とも性について話しあえるようになろうと思う。人間として、女性として、危険であり、かつ最も男女が親密になるのである性を、まじめに、正面から考えていこうと思う。

それにしてもこの気持と、世間などでいわれている、あの開放的なふんい気とのギャップは何なのであろうか。

(7) 男性S

私は小学校の頃塾に通っており、そこで成績が良かったため、家から遠く離れた中学を受験しそこへ通うようになった。問題はその中学が男子校だったということだ。しかもそこは中学・高校の六年間一貫教育のシステムをとっていた。さらには距離的に家から通うのが不可能で寮に入ることになったのだが、その建物は学校の敷地内にあった。かくして私は女っ気のない寮と学校の往復を六年間くり返すことになったのである。

年齢的に異性への関心の高まってきた我々の情報源は不良図書（と呼ばれていたのでその名を使います）であり、そこから得た少々非現実的で過激な表現や発言が、女生徒の目をはばかり必要なく仲間内でとび交うようになる。しかし普段下品な表現を使いきらいやらしいことを言っているくせに内心では異性に関して清純な幻影を抱き、普段口に出してるような性的行為はおろか、女の子とともに会話することさえ出来ない、いわゆる純情

な少年だった。

そんな六年間を経て大学生となり実際に同世代の女の子と接触するようになるが、自分の描いていたイメージとあまりに違いのある現実の女の子の考え方は私にはただただ驚きであった。男女交際に対する考え方やセックスの見方など、それまで抱いていた理想はあらかた消え去ったが、心のどこかではいまだにわりきれない部分がある。

ロリータコンプレックスや悪い意味での女たらしなどは、自分の抱いていたイメージと現実の差に耐えられなかった人々だと理解できなくもない。しかし社会適応という点で明らかに問題があり、それがすなわち男子校の問題点だと思う。

(8) 女性K

私がカナダの国際学校に通っていた時に受けたエイズ教育は今でも強く印象に残っている。その日は一日中、産婦人科医やカウンセラー、実際のエイズ患者等からエイズや性一般に関する講義や討論にさかれた。私は主に二つの事に驚かされた。それはどちらも日本で受けた性教育とは全く異なるものであった。

その一つは、性に関する話のすべての内容が若い男女でも性行為をもつであろうということを前提に成立していたことである。そのため中絶や避妊の手段に関することがとても実用性を帯びた知識として私達に与えられた。レクチャーの一人がコンドームを生徒全員に配り使い方を指導したことが良い例だ。もう一つは講義もその後の討論もすべて男女区別することなく一緒に行われたことだ。日本では常に男女別で行われ、一種のタブーとされていたためショッキングな体験でもあった。講義の中では男女両方が性に関して偏ることなく同等の知識をもつことの重要さが強調された。男女一緒に性の互いの立場をオープンに話合うことで今まで性に関してもっていたいやらしさやタブーといった意識がいつの間にか改善された。今ではむしろ男の人ともオープンに話合えることは非常に重要だと思っている。それが性に関して正しい理解を促す最良の道だからだ。これらのことを教

えてくれたあのカナダでの一日は私のセクシュアリティ形成に大きな影響を与えてくれたのだ。

以上、190名の受講者のうちのわずか8名のものを紹介したにすぎないがそれぞれが実に多様な歴史を背負って生きてきたことがわかる。そして大学の性教育も単に「知」を育てるだけでなく彼等のセクシュアリティ形成に響いていくものでありたいと願っている。

上記のレポートは講義を終了したあとの提出物の一部として課したものである。

残余の枚数を講義の骨格を紹介することに充てる。

④ (1) 人生80～85年時代の生と性

ここでは導入をかねてライフサイクルの変化に着目させた。そして「延命と少産」「両性の平等性の追求」「性的自己決定」をキーワードにして結婚、家族、性モラル、両性関係のあり方が底揺れする背景を考えさせた。

(2) 性と人権

まず人工中絶をめぐる各国の状況を「ABORTION～北と南の女たち～」というビデオを視聴することで理解させようとした。その後アメリカにおける中絶論争と法的措置の変化をとりあげながら考えを深めた。さらにわが国における優生保護法の成立の背景をたどりながらこの法律の特徴と今日の問題状況について解説した。

(3) 性と生殖

ここでは出産・出生のメカニズムをみつめなおすということで特に「胎児は母体にとって異物」であることを軸に生命への認識を深めることに主眼をおいた。また「ほぼ一ケ年は母体外胎児」といわれるように養育の不可避性と人間的形質の「獲得」について理解させるようにした。こうした学習によって母子一体論の克服と「他者」としての養育の意味について考えさせたかったのである。

(4) 人間の性の最低条件としての避妊

年間50万件にも及ぶ人工中絶、その90%以上が既婚者によって占められている事実をもとに避妊のむずかしさと絶対必要性に気づかせる。特に、避妊のメカニズムの正確な理解もさることながら「二人の関係の質」こそが決め手であること、二人でとりくめるかどうかが決定的な鍵であることを強調したい。

(5) 性差を考える

性差についてその発生をたどりながら“男と女”なにが異なるのか、異ならないのか考察していく。特にこの学習を通じて性器の性分化、さらに脳の性分化など「人間の両性性」に着目させる。そしてそこから固定的な性差観や“特性”の名による区別が差別に限りなく近づくことを考えさせたい。そして一人ひとりの性度、個性に注目するような人間観を育てたい。

(6) 人間の性の多様性一育てられるものとして

人間の性には生殖と性愛の両面がある。生殖の性はヘテロセクシュアルというスタイルをとり公認されたものであるがもう一つの「性愛」には実に多様な表現を伴う。同性愛、ナルシズム、ペドフィリア、フェティシズム etc.。

こうしたバリエーションを「育ち」への考察もふくめて考えさせたい。

前半部の受講者のレポートはこの「育てられるセクシュアリティ」の講義から引き出されたものである。

(7) セクシュアルハラスメント、レイプとは

『声なき叫び』という映画を視聴しそこから学習課題をひき出した。このテーマは受講者の反応が最も大きかったものの一つである。特にレイプをめぐる神話は彼らの偏見そのものであったことも驚きであったようである。

(8) 共生について考える—結婚は、家族はどうなっていくか—

ひとはなぜ「つがい」を形成してきたかをたどりながら結婚の「核」と制度としてのその矛盾を考えさせたい。さらに『スウェーデンの結婚と家族』を視聴し、その行く末の一つの形について認識させたかった。

- (9) 女性差別撤廃条約とこれからの男女関係
これこそ彼等がこれから直面するテーマである。

事態を客観的に見つめ、より主体的に対応するためにもしめくりとしてこの課題を提起した。

以上が講義のあらすじである。願わくばもっと少人数でディスカッションをさせたり、課題を与えたりしながら深めたいのであるが、いかんせんマイク授業になってしまっている。

IV. 90 年 度 活 動 日 誌

月 日	報 告 内 容	報告者
5 23 研究会 1	壁崩壊までの東ドイツのスポーツ・システム ーその歴史・社会学的研究のための予備的研究ー フランス社会学研究の潮流ーフランス在外研究報告ー	上 野 早 川
6 26 時事問題検討会 1	「生涯学習振興法案の検討」	川 口
7 10 研究会 2	大学における性教育	村 瀬
10 16 研究会 3	「革命」後の東欧スポーツ	唐 木
11 1 秋季相模湖研究合宿 ～ 2	「生涯スポーツ」とスポーツ産業 スポーツ運動の研究 外国研究ーフランススポーツ社会学研究の動向ー	尾 崎 上 野 早 川
12 18 研究会 4	日本スポーツの現状について ー政府・財界のスポーツ戦略ー	関
コメント	講師 寺西 俊一（一橋大学経済学部助教授）	